選後批評(乙種)

短評

八波則吉

「自省」――幼稚。

「出て行け」――簡素。田舍芝居の稽古場がよい。

「竈」――もう一息。戀も餘りに淡い。

「五高社員となるまで」――小說とも思はれない。

「慘な親子」――相當に出來てはゐるが、推敲が足りない。

「芽生えんとする友情の破綻」――强い反省、達者な筆。

「父」――拵へもの。

「幻の消え行く時」――演ずる劇としては兎も角、これ程の長篇を飽かせず讀ませる手腕は大したものだ。力作。

「避難所の黃昏」――情景の一致に苦心してかなりに成功してゐる。

「煤け大黑」――事實の生々しさが長所でもあれば短所でもある。

選後に

上田英夫

幻の消え行く時――これだけの長篇を書きあげた作者の勞は多とするが、餘りに手をひろげ過ぎたせいか作者の方が力敗けをした感がある。もう少し場面を縮小したならばよかつたであらう。

次に作者の態度がぐらついてゐる。かういふ題材を扱ふ以上は作者はもつともつと無遠慮であつていゝのだ。作者はあらゆる傳統を離れて自己のものを作ることに心懸けねばならない。筑紫長者の邸で狹手彦達は可成氣焰をあげてゐるが、(作者が少々露骨に出來て過ぎたが)寧ろこの元氣がほしい。全体として總ての點が不消化勝である。不消化だから人物なども皆死んで了つてゐる。この作に於て少し輪廓のハツキリした人物がゐるか。狹手彦の說いてゐる哲學(?)なども生煮らしく聞